

【研究ノート】

「島」から「列島」へ—16世紀中葉のイエズス会士
による日本地理把握の変遷についての一考察

椎 名 浩

Research Note

From an Island to the Islands: A Study on the Succession in the Geographical Image of Japan among the Jesuits in the Mid-16th Century

Hiroshi SHIINA

Abstract

In the 16th century, Jesuits who visited Japan often described this land as an “island” (pt. *ilha* / sp. *isla*), rather than the “islands” (*ilhas* / *islas*), as late as the mid-1560s. Later, Alessandro Valignano S. J., in his *Sumario de Japón* (1583), described Japan as “a country of various islands, divided in 66 kingdoms (*reinos*)”, recognizing that it is composed of three main islands (Honshu, Shikoku and Kyushu) and many others: This suggests that some change or “progress” took place on the geographical image of Japan among the Jesuits, during the latter half of that century.

The turning point was supposed to be around 1560: In 1559, Jesuits began the mission in Kinai Region, Japan’s metropolitan area at that time. That brought them a drastic change in the geographical image of Japan, or (more directly) by extending their reach more than 500 km to the east, or (indirectly) by a comprehensive knowledge about the political-

geographical structure of this country. On the other hand, in Kyushu, from 1561 Jesuits opened new “inland” routes in their mission actions (for example, from Bungo through Higo and Ariake Sea, to the Shimabara Peninsula and Nagasaki), besides the previous “coastal” ones (ex., from Bungo through Hakata to Hirado). All these factors seemed to enable them to understand Japan more “two-dimensionally” than the previous period of “one-dimensional” actions.

I. 問題提起

筆者は、16世紀に来日したイエズス会宣教師の間で、日本の政治的支配者とその支配領域、都市をはじめする住民の空間編成の単位、また身分がどのように形容されたかについて関心を寄せてきた¹。それらを解明する作業の中で、筆者にとって印象的であったことのひとつが、1549年の布教開始から年数を経ても、宣教師たちが日本の国土を語る際、「島」の語の単数形（葡 *ilha*, 西 *isla*）—複数形（葡 *ilhas*, 西 *islas*）ではなく一用いていることであった。つまり本州・四国・九州の主要3島からなる列島²ではなく、種子島、平戸などの小島を周辺に配しながらも、鹿児島、豊後（府内）から堺、京あるいは坂東までが、あたかも一つの島に位置するかのように述べているのである。たとえば、布教開始から約10年が経過した1561年のコスメ・デ・トーレス書簡（後述）でもそうである。

一方、トーレス書簡から約20年を経過した1583年にアレッサンドロ・ヴァリニャーノが執筆した『日本諸事要録』（以下『要録』）では、日本は「66ヶ国に分かれた、多数の島嶼から成る地方³」と形容され、列島イメージが定着していることがみてとれる。したがって、この間のいずれかの時期に、宣教師の間で、日本の国土の広がりについての理解・表現の仕方に変化（「列島」がより正確な把握であると価値判断するなら、「進展」ないし「深化」）があったものとおもわれる。

そこで本稿では、ザビエル来日以降約30年間の宣教師文書から、日本を単数形・複数形双方で「島」と形容した箇所を抽出し、その表現が「列島」に移行し

ていく過程、およびそうした変化が生じた（価値判断的にいえば、「列島」としての理解が可能になった）背景について検討する。中心史料は『16・7世紀イエズス会日本報告集』⁴（以下『報告集』）とし、原文は天理大学図書館蔵本のファクシミリ版⁵を参照するが、引用にあたっていくつかの特殊文字を改変する（例：f→s, d→de, q→que）。訳文は基本的に『報告集』に従うが、部分引用によって文意が通らなくなる箇所は適宜書き換え、いくつかの訳語を改変する（例：「10里」→「10レグア」⁶、「国主」→「国王」）。補足・注釈は〔 〕内に記す。

なお、本稿でとりあげるテーマからすぐさま想起されるのは、同時期にヨーロッパで作成された地図中の日本像（次章参照）であろう。この分野については中村拓⁷、岡本良知⁸、織田武雄⁹、三好唯義¹⁰の各氏を代表とする豊富な研究の蓄積がある¹¹。また三好氏には、宣教師報告がもたらす情報と日本像との関係についての考察もある¹²。本稿でもこれらの成果を適宜参照し、宣教師の記事を考察する助けとしたい。

Ⅱ. 地図発達史からの考察

本章では、ヨーロッパで作成された日本図のうち、本稿で扱う宣教師文書と、日本イメージに関して何からの相互影響があったとみられるものを中心に紹介する。

1. 実見以前のイメージ「ジパング島」

ヨーロッパの地図上における日本像の変遷を考えるうえで大きな要因は、実態的な情報に接する以前から、マルコ・ポーロの情報にもとづいて「ジパング島」が描かれていたことである。もとより、13世紀にヨーロッパに伝わった「ジパング」が実際に日本であったかは不確かであり、とくに最近の研究では否定的な見解が主流となりつつある¹³。とはいえ、16世紀の地理上の議論において、あらたに「発見された」日本についての情報が、「ジパング」という既定の知識を確認する文脈で受けとられ、後者は最終的に日本にとって代わられたことはたしかで

ある。

1492年にドイツでM.ベハイムが作成した地球儀では、アジア大陸の東岸とその沖合のジバング(南北に細長い一つの島として描かれている)は、大西洋をはさんでヨーロッパ・アフリカと対峙している¹⁴。奇しくも同じ年に「新大陸」に到達したコロンブスが、西廻り航路を構想した際に思い描いた世界像も、ほぼこのようなものだったろう(図1¹⁵参照)。

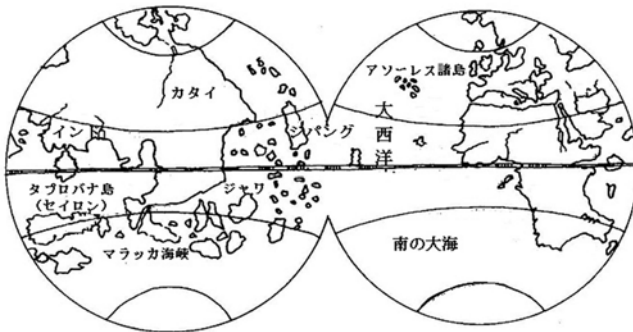


図1 ベハイムの地球儀(1492年)(概念図)

1549年に作成された「ミュンスター南北アメリカ図」(「東アジア図」と一対)は、ベハイムの世界観に、西廻り航路の行く手に現れた南北アメリカの情報が「割り込んだ」形である。ジバングは北アメリカ沖に、ほぼ南北を向いた縦長矩形の島として描かれ、その周辺には、「7448の島々からなる多島海 Archipelagus 7448 insularū」が描かれている(図2¹⁶参照)。



図2 ミュンスター南北アメリカ図(1549年)(概念図)

2. 最初期の実見情報—群島日本とジパングの併存

ポルトガル人の種子島到達(1543年)を機に、実見情報にもとづく日本図が作成されるようになる。つまりそれは、同国の東廻り航海で得られた知見の一部としてヨーロッパに伝えられたのである

その最も古い例は、1550年頃作成の通称「ヴァリセリアナ図」で、ここでは中国CHINA沖に数珠つなぎの群島(丸みを帯びた「J」形に並ぶ)が描かれている¹⁷。ついで1554年に作成された「ロポ・オーメン図」では、中国東部から南に向けて二股状の半島が伸びており、その先端は、それぞれ四国、本州(中国地方付近)を描写しているようにも見える。その南には九州とおぼしき地形が密集した群島として描かれ、さらにその南に、西にゆるやかなカーブを描きながら琉球Lequiosが連なっている。この図でもう一つ注目すべきは、日本からさらに東の洋上にジパングとおぼしき大きな島と、その周辺に星雲状に多島海が描かれていることで、「新発見の地」日本が、当初は「ジパング」と同一視されていなかったことがうかがえる(図3¹⁸参照)。

一方、1561年に作成されたバルトロメウ・ヴェリュの日本図では「日本IAPAM」は中国大陸から切り離されて、南北に細長い群島として描かれ、本州



図3 ロボ・オーメン地図(1554年)(概念図)

の西半分と四国(「土佐 TONSA」)が、西端を南(地図では下)に向けて90度回転した形になっている。その南に接する九州は、ここでも群島として描かれている(図4¹⁹参照)。



図4 ヴェリユ日本図(1561年)(概念図)

3. ジバングとの同一化

前節で見た一連の日本地図がすでに群島として描かれているのにたいし、その後出版された世界地図帳では、日本は、しばしばひとつの大きな島が群島を従えている姿で描かれた。「列島」を基準に価値判断するなら、「一時的後退」となるか。代表的な例は、A.オルテリウスが編纂した世界地図帳の1570年版に掲載された「東インド図」中の日本図である²⁰。ここでは、まずIAPANと記された、丸みを帯びた五角形（底辺が上）の大きな島（以下「日本島」）が描かれ、その中に鹿児島 Cangoxima、山口 Amanguco、根来、[都のアカデミー Miaco academia（比叡山延暦寺）]、坂東 Banduといった地名が書き込まれている。これらの地名からして、地理情報はザビエル段階のそれ（次章2節参照）が基本になっているとおもわれる。日本島の北岸からは北西方向に群島が連なり、「Torza（土佐）」「都諸島 Ins: de Miaco」といった書き込みがある。一方南岸から東南方向に連なる群島には、「大琉球 Lequio mayor」「小琉球 Lequio manor」「フェルモサ島 y^a. Fermoza」といった地名がみられる。日本島も含め、全体として東方向にふくらんだ弧を描いている（図5²¹参照）。



図5 オルテリウス「東インド図」中の日本（1570年）（概念図）

日本島の横に「この島を、ヴェネツィアのM. ポーロはジパングとよんだHanc insulam M. Paul Venet Zipangri vocat」と書かれているように、こうした日本図の登場には、日本をジパングと同一視する見解が流布してきたこと²²と大きくかかわっている。かつてのジパング図では周囲に星雲状に配された小島は、実見情報にもとづいて数珠つなぎの群島に修正されている。初期に宣教師・商人の主な活動の場であった九州が極大化して「ジパング島」の役割を演ずる一方²³、本州・四国は極小化して群島に埋没している。いわば、1節と2節の系統が統合された姿といえる。

4. 再び群島へ

一方、並行して日本を群島として描く例も見られ、これには主に2系統が見受けられる。1つは、2節の地図群、とくにヴェリユ図の応用ないし改良版というもので、「東インド図」と同様オルテリウス世界地図帳の1570年版に収録された「タルタリア図」に描かれたものが代表的なものである。本州（西日本）・四国（「土佐」TONSA）が横長に（東西方向を向いて）描かれている。九州とおぼしき部分は複数の島として描かれ、そのうちのひとつに鹿児島 Cogoxumaが記入されている一方、豊後 Bungoは本州に記されている。本州にはその他、山口 Amanguco、銀鉱山 Minas de plata（石見銀山）、都 Meaco、大坂 Osaquoなどが記されている（図6²⁴参照）。

もう1つの傾向は、紀伊半島が強調されたㄣ形の本州に縦長矩形の九州が接し、両者でㄣ形をつくって、その間に横長矩形の四国が配されるというもので、1568年に作成された「ドウラード図」に起源を発し、96年にラングレンが作成して、リンスホーテンの『東方案内記』に挿入された「アジア図」での日本図に反映している。これらの図では九州のイメージは単一の島に統合されつつ、随所で入江が深く入り込んでいる（ラングレンではのこぎりの刃のようなパターンに簡略化）（図7²⁵参照）。



図6 オルテリウス「タルタリア図」中の日本（1570年）（概念図）



図7 ドウラード日本図（1568年）、ラングレン東アジア図（1596年）（概念図）

5. 行基図の影響と列島イメージの完成

これまで見た、島や海岸線を詳述する、いわば「海図系」ともいうべき一連の地図とは異なる発想の日本図が、1580年頃イタリアで作成された。フィレンツェの文書館に所蔵されているため「フィレンツェ図」と通称されるその日本地図は、不定形のピースが石垣状に連なって九州、四国、本州を形作っている。各々のピースには西洋風の建物が描きこまれ、国名と数字（薩摩 Saccuma -13, 奥

州 Voxu-54など)が書かれている。これらの数字は各国の郡数に対応している。いくつかの建物の尖塔には十字を描いた旗が掲げられており、キリスト教の布教が行われた地域を指すとみられる(図8²⁶参照)。



図8 フィレンツェ地図(1580年頃)(概念図)

このフィレンツェ図からすぐさま想起されるのが、中世～江戸初期にかけて作成された、諸国を石垣状に配して都までの道筋を示す「行基図」²⁷と総称される一連の地図群である。一例として、唐招提寺蔵「南なんせんぶしゅう膽部州大日本正統図」(1557年頃)を挙げる(図9²⁸)。フィレンツェ図では全体の形状に加え、南(画面上)に「女性だけが住む島」(行基図の伝統的な構図である、南方の羅刹国に通じる)についての書き込みもあることから、16世紀後半に伝わった行基図の一つが翻訳されたものと推測される。1580年代に天正遣欧使節が伝えたとの説もあるが、確証はない²⁹。

オルテリウス世界地図帳の1595年版には、単体図として日本図が掲載される。「日本島の図 IAPONIAE INSULAE DISCRIPTIO」と題し、ポルトガル人ルイス・テイシェイラが原図を作成したことから「テイシェイラ図」とよばれるこの日本図(図10³⁰)は、関東以北がまだ簡略な描写にとどまるものの、ほぼ本州・四国、九州を実体情報にもとづいて描いており、それまでの日本図に比べれば格段に詳細で正確な日本の姿を示している。特に瀬戸内海～九州沿岸の詳細を極



図9 行基図の例 (概念図)



図10 テイシェイラ日本図 (1595年) (概念図)

めた描写は、「海図系」日本図の一つの到達点である。全国の分国名が記入され、それに対応して西洋風の建物が描かれていることなどは、フィレンツェ図と同様、行基図の影響が見てとれる。九州に限って言えば、豊後の地名が詳述される一方、西九州では平戸 Firando、志岐 Xiquiはあるが博多、大村、有馬、長崎(1571年開港)などが見られず、1566年にアルメイダが天草志岐の布教を開始し、70年に志岐で布教長がトーレスからカブラルに交代、まもなくトーレスが同地で死去するまでの時期の情報が反映していると思われる。ともかくこのテイシェイラ図によって、ヨーロッパ人はもはやジパングを媒介とすることなく、日本の実態情報を世界図に統合するに至ったといえる。

Ⅲ. 宣教師文書における「島」イメージの変遷

1. 概観

次頁の表に、ザビエル来航前後からヴァリニャーノの『要録』に至る宣教師文書で、文中に日本を「島」(単数形を○, 複数形を●で示す)と表現した箇所があるもの、および該当箇所の文面(一部は概要を記し、2節以下で詳述)を示す。年代に#がつくものは、執筆者が来日前に執筆したものである。以下本稿でこれらの記事を引用する際は、『要録』を除き、表左端の番号で示す。

関連記事を概観して気付くことは、記事の絶対数が少なく散在していて、しかも年代的な偏りがあることである。したがって、日本像の変遷過程、とくに「島」から「列島」への変わり目を確認するには、やや情報不足の感は否めない。そのことを踏まえたうえで、以下、記述が比較的詳細で内容的にも重要とおもわれる記事を中心に、いくつかの時期を区分して検討を加えていきたい。

2. ザビエルの「島」イメージ

布教初期の記事でとりわけ印象的なのは、ザビエルの記述(1~3)において、すでに単数・複数双方のイメージが混在し、目まぐるしく変遷していることである。まず、日本への出発にあたってゴアで書かれた1では、日本を中国との位置

表：宣教師文書の「島」関連記事（1549～83年）

	年代	執筆者	出典	文面
1	○ 1549.1.20#	フランシスコ・ザビエル	ゴア発、イエズス会ポルトガル管区長宛書簡	中国の200レグア、もしくはそれ以上の彼方にある日本の島 ³¹
2	● 1549.6.22#	ザビエル	マラッカ発、ヨーロッパのイエズス会士宛書簡	日本諸島 国王のいる島
3	○ 1549.11.5	ザビエル	鹿児島発、ゴア学院の修道士宛書簡	ここ日本の島は、わが聖教をひろめるのに、はなはだ適した状況にある ³² 。
4	○ 1555. 9 23	バルタザール・ガーゴ	日本発 ³³ 、インドおよびポルトガルのイエズス会士宛書簡	山口→この島の中央北寄り位置した大きな都市 ³⁴
5	● 1557.10.29	ガスパル・ヴィレラ	平戸発、インドおよびヨーロッパのイエズス会士宛書簡	山口は内陸へ60レグア ³⁵ 日本の諸島as ilhas de Iapam
6	● 1558.1.10	ベルショール・ヌーニェス	コチン発、ポルトガルのイエズス会士宛書簡	主は日本の島々において、悪魔が大なる戦闘をもってわが聖教に対抗するに従って、御慈悲を大いに示し給うてきた ³⁶
7	○ 1561.10.8	コスメ・デ・トレス	豊後発、イエズス会インド管区長宛書簡	鹿児島、平戸、山口、都が、それぞれ島の南、西、北、東。
8	● 1563.11.17	ルイス・デ・アルメイダ	横瀬浦発、インドの修道士宛書簡	この日本地方は主たる2つの島から成っており、両者は3分の1レグアほど隔たっているであろう ³⁷ 。
9	○ 1564.7.13	ヴィレラ	都発、ポルトガルのイエズス会士宛書簡	この日本の島は66カ国に分かれており、かつてそれらの国々は皆、内裏と称する君主に従属していた ³⁸ 。
10	● 1565.2.20	ルイス・フロイス	都発、インドのイエズス会士宛書簡	この諸島にははなはだしく相反する性質があつて、夏はいとも暑く、冬はきわめて寒い ³⁹ 。
11	○ 1565.9.15	ヴィレラ	堺発、ポルトガル、アヴィスの修道院宛書簡	この地は広大であり66カ国を有し、それらの国々はことごとく島内にあつて海に囲まれている ⁴⁰ 。
12	○ 1577.6.5	フロイス	臼杵発、ポルトガルのイエズス会士宛書簡	世界を治めるヨーロッパの君主国に比べれば、日本は知られて間もない小さな島であるが… ⁴¹
13	● 1579.12.10	フランシスコ・カリオン	口之津発、1579年度日本年報	日本→3つの主要な島（地方） 主要な島→53ヶ国を有し、都が所在 下（しも）（九州）→9カ国 四国→4カ国
	● 1583	ヴァリニャーノ	『日本諸事要録』	日本は66ヶ国に分かれた、多数の島嶼からなる地方

関係において簡潔に、一つの島と表現している。その後日本への途上マラッカで書かれた2では、「かの日本諸島の有力な一領主 [島津氏?] はキリシタンになることを望んでおり⁴²」, 「日本に到着したら、我らは国王のいる島 [本州, 「国王」は天皇または将軍] に行く決心である⁴³」といった記述がみられ、日本を諸島ととらえている。マラッカはゴアに比べて日本情報も豊富ではあったろうが、事前に様々な日本情報に接し⁴⁴, 自身マラッカを何度も訪れていたザビエルの日本観が、この寄港で劇的に変化したとは考えにくい。来日前のザビエルのイメージは基本的に「諸島」であり、1の表現は中国大陸との関係で象徴的に用いたものと思われる。

3は別名「大書翰」とよばれ、ザビエルが実見にもとづいて日本情報を伝え、かつ日本人の資質を高く評価した文書として著名であるが、ここで日本は、再び単一の島として表現される。3でザビエルは、現在の所在地である薩摩のほか、京都、比叡山、坂東の「大学」(足利学校)に言及しているが、これらの地点の位置関係が詳述されているわけでもなく、全体として地理的記述はけっして多くはない。この傾向は、離日後の1552年1月29日付書簡⁴⁵でも同様であり、ザビエルが約2年の滞在中にいただいた日本国土像を再現することはむずかしい。ただ彼をはじめ、情報の乏しい中で来日した初期のヨーロッパ人たちは、訪れた地を起点として周辺を面的に把握するより、主として海路で訪れた地点をいわば「一筆書き」する形で日本の空間を把握していたと考えられる。また前章3節でみた日本図や、日本に残った同僚たちの記述(次節参照)を傍証とすれば、滞在の大半を占めた九州がザビエルの日本像で大きな割合を占めた、あるいは九州と本州が混然一体となっていた可能性が高い。実際、ザビエルの日本における行程(鹿児島→平戸→《博多?》→山口→堺→京→堺→山口→豊後→離日)を、実際の日本の地形をあえて捨象して位置づけると⁴⁶, 南と東に「┌」形に広がる一つの島の上に矛盾なく位置づけられる(図11参照)。しかもこうしたイメージは、約10年後にコスメ・デ・トーレスが披露するイメージ(次節参照)とも符合するのは興味深い。

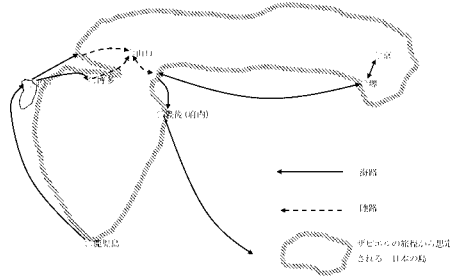


図11 ザビエルの旅程と空間イメージ（概念図）

3. ザビエル離日後～トーレス書簡（1961年）まで

ザビエル離日後約10年間のイエズス会士の間では、「島」（4，7）と「諸島」（5，6）の形容が併存するが、九州を日本全体と同一視する傾向は共通していた。山口に布教の拠点がおかれていた時期の4における山口の位置についての形容からは、九州に防長両国を足した範囲で、日本の国土の広がりが見えられていたことがうかがえる。1556年には山口が戦火に見舞われ、布教の拠点は豊後に移る。59年ガスパル・ヴィレラにより畿内布教が再開するまでは、宣教師の行動半径や情報は事実上九州に限られ、こうした傾向は持続ないし強まったと思われる。たとえば5では、ヴィレラは平戸港を「[[日本の] 北方の島の先端に na cabeça da ilha para a parte do norte⁴⁷」あるとし、また大友宗麟の改宗への展望に触れた箇所「今や彼は全日本の主なる王であるなら、彼がもしキリシタンとなれば、日本の諸島はほとんどあまねくその創造主を知るに至ることは、もはや疑いないからである⁴⁸」と形容している。ここでヴィレラは日本を諸島とする一方、山口を「内陸へ60レグア」としている。スペイン・ポルトガル式に300～360km前後とするにせよ、日本式に60里とするにせよ、最寄りの海岸から山口までそれほどの距離はなく、豊後から陸続きでイメージされているのだろう。もっとも“pola terra”を「陸路」ととれば、「諸島」との整合性はある。

7では、この時点でのイエズス会布教の成果と日本理解がまとめられており、

10年前にザビエルがつづった3と比較しうる内容である。「当日本の島と地 esta Ilha e terra do Iapaô」は「長さが600レグア 600 legoas em comprimento」あるとし⁴⁹、ついで日本の気候風土、日本人の気質、聖俗の権威者⁵⁰、日本人の信仰と宗派について説明された後、現時点の日本における布教活動の拠点として、豊後(府内)・朽網・平戸・博多・鹿児島・山口・都・堺の順に8ヶ所が挙げられ、各地の状況が報告されている。まず豊後は、「[北緯] 33度半に位置し、この島の北方の東よりで、我々が住むところ⁵¹」とされ、平戸が「日本の島の反対側、すなわち西方にあり、豊後から45ないし50レグア離れている⁵²」、鹿児島が「島の南端、[北緯] 31度付近にあり、ここ豊後からは60レグアかそれ以上隔たっている⁵³」、山口が「北方に位置しており、ここ豊後からは50レグア離れている⁵⁴」、都が「島の反対側、すなわち東方に面したところにあつて豊後から150レグア離れて⁵⁵」いる、と形容されている。また、朽網が「豊後から9レグア *estará d'elle noue legoas*⁵⁶」、博多が「平戸から内陸に20ないし25レグア⁵⁷」、堺が「都から数レグア *que está do Miáco pera ca poucas legoas*⁵⁸」と述べられている。

こうしたトーレスの記述を、あえて額面どおり受け取るならば、彼の描く日本の国土は、九州に本州の一部(山口周辺)を合わせた(あるいは山口が九州北部に位置づけられている)に、本州の西半分がやや縮小して接続した、全体として「**Γ**」形の単一の島ということになり、玄界灘～関門海峡にかけては、「島」の北西端から入り込んだ内湾のようにとらえられている(図12参照)。もとより現実には、宣教師は関門海峡をはさんで豊後と博多、平戸をひんばんに往来しているが、統合的なイメージとしては、前節で見たザビエルの理解から大きく隔たっていない印象をうける。

4. トーレス書簡以降1565年まで

7以降の数年間も、双方の傾向の記事が併存する。そのうち諸島イメージを反映しているのが8と10であるが、なかでも8は、本州と九州が、関門海峡を隔てて向き合う別個の島であることを明瞭にのべていて注目される。アルメイダは続

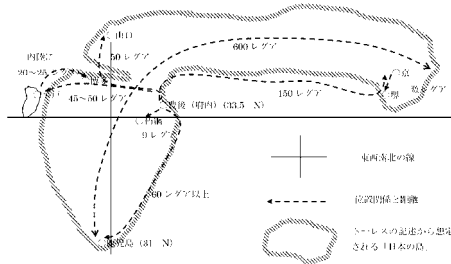


図12 トーレスの「日本の島」イメージ (1561年) (概念図)

いて、2つの主要な島のうち「第1の地域に3人の国王〔大友氏、有馬氏、島津氏〕がいる *nesta primeira parte ha tres reis*⁵⁹」としており、布教の拠点であった九州が記述の基準点となっている。

これに対し、単一の島という形容を用いている代表的な人物がヴィレラ (9, 11) であり、2例とも、「66カ国」というキーワードを用いて、日本を、複数の権力領域を内包する複合体として説明しようとする文脈で登場するのは興味深い。

5. 「島」言及の空白期

11から12までは約12年の開きがある。言いかえれば、日本全体を「島」あるいは「諸島」と表現する記述は布教開始から約15年間に集中し、以後そうした記述そのものが沈静化して、個別地域での活動の記述が主体になるということになる。「島」イメージへの明確な否定の文言こそないものの、筆者はこの間の沈黙のうちに、日本像の「列島」への転換があったとみている。12では日本は一つの島と形容されているが、この箇所は国土の広がりの実態的イメージというより、多分にヨーロッパ大陸にくらべて小さいという文脈（今日用いられる「島国」という表現に近い）ものである。

6. 列島イメージの定着

1579年から82年にかけて日本巡察を行ったヴァリニャーノは、布教のさまざまな改革を断行したが、その一つが、従来各々の宣教師が個別に書簡を送っていたものを、特定の宣教師が一定の書式にしたがい、3布教区(シモ、豊後、都)ごとにその年の布教状況を報告するという、いわゆる年報方式の採用である。その初年度ものである13では、読み手であるイエズス会総長に理解してもらいたいこととして、「この日本は66の小国を有し、3つの島、すなわち主要な地方に区分される⁶⁰⁾」ことを挙げたうえで、「第一の主要なる島は53ヶ国を有し、ここ日本全国で最も高貴、かつ主要な市の都がある⁶¹⁾」、「日本を分ける第二の地方は下(しも)と称し9カ国を擁している⁶²⁾」、「日本を分ける第3の地方は四国と称する別の島で4カ国を擁する⁶³⁾」と述べられている。

この12を一つの「結論」として、以後のイエズス会年報では、日本全体を「島」ないし「諸島」として説明する記述自体が後を絶ち、前置きなしに3教区の布教状況が述べられている。本州・四国・九州の主要3島からなる列島という像が、ザビエル来航後30年を経て、すくなくとも来日宣教師の間では「常識」となったとみてよいであろう。

IV. 「島」イメージ転換の背景—結論にかえて

以上、ザビエル来航前後から1580年前後までの宣教師文書から、日本を「島」あるいは「諸島」と形容している箇所を検討した、その結果、次の2点が確認できた。

①当初の予想に反して、双方の表現は、布教初期あるいは来日前から並行して、あるいは交互に登場する。時には一人の人物(ザビエル)においてさえそうであった(1~3)。こうした状況は、少なくとも1560年代半ばまで続く。

②その一方で、日本全体を単一の島と把握する傾向(7など)が、しだいに本州・四国・九州の3島という把握に移行していったことも確かであり、1579年に年報制度が開始する時点(12)では後者が定着している。

以下、①の状態が続いたのはなぜか、また（当初の問題提起でもある）②の契機は何であったのかを、いくつかの角度から考えてみたい。

1. まず、双方の表現がもともと微妙に異なるニュアンスを含んでおり、したがって両立しえた可能性がある。薩南諸島や平戸島の見聞をふまえ、これらを含めた表現である「諸島」と、こうした大小の島々を従えた「主要な島」のほうに着目した表現とのちがいが、というわけである。後者については、初期布教における九州の比重の大きさを、ジパングのイメージといったことが影響として考えられる。

2. そのようにみると、むしろ画期的なのは、「主要な島」を九州・本州の2者に分けたアルメイダの記述（8）であり、列島イメージ形成に向けての重要な里程標といえる。

そのような表現が可能になったのは、1560年前後に相ついで起きた、布教史上の重要な出来事と密接に関係すると思われる。まず1559年、ヴィレラにより畿内布教が再開した（ザビエルの滞在が短期間にとどまったことを考えれば、事実上の開始）。このことで、直接的には宣教師たちの行動半径が500km以上東に広がったし、政治・文化の中心地に身を置くことで、実際に訪れていない地域もふくめ、日本の地理・政治構造についての包括的な情報にも接することができた。「66カ国」といった表現、またそれを視覚的に表現した行基図の入手（Ⅱ章5節参照）はその象徴であろう。

また1561年の「宮の前事件」⁶⁴による平戸（松浦氏）との関係悪化を機に、イエズス会は大村氏、有馬氏との連携を深め、翌62年に大村領の横瀬浦が南蛮貿易として開港、63年には大村純忠が受洗して初のキリシタン大名の誕生へと展開していく。並行して、これまでの豊後～博多～平戸という九州北岸沿いのルートに加え、豊後から陸路肥後に入り、高瀬から有明海に出、島原、大村、長崎方面に至るルートが開拓された。61年暮れ、アルメイダがこのルートで豊後から薩摩に向かい、以後63年にかけて、トーレス、アルメイダらが横瀬浦、有馬などとひんばんに往来する。安野眞幸氏は、1571年の長崎開港につながるこの「南回り」

ルートの開拓に、大友氏による南蛮貿易支配の新たな段階を見⁶⁵、川村信三氏はこれを「キリシタン・ベルト」とよび、その背景に豊後内陸のキリシタン宗団という人的ネットワークの充実を見ている⁶⁶。本稿との関わりでいえば、一見すると関門海峡の往来から離れ、列島イメージの形成からは後退するかに思えるこの動きは、むしろ宣教師たちの意識の中で、九州という島の幅と外周を確定させる効果があったのではないか。いずれにせよ、Ⅲ章2節で「一筆書き」と表現した、日本空間のいわば「一次的」な理解が「二次元的」な理解に移行していく契機が、様々な形でこの1560年前後に見うけられる。

3. 筆者はⅠ章で「日本の国土の広がりについての理解・表現の仕方」と書き、以後本稿では「理解」と「表現」の両者をあえて区別せずに用いてきたが、ここであらためて、両者をそれぞれ固有のものとして考えてみたい。つまり実体情報としての「日本諸島」と、言語表象としての「日本島」ということである。あえて言えば、元船乗りの日本人ヤジロウに導かれて来日し、その後何度となく関門海峡を往来したイエズス会士たちは、日本が群島であることは百も承知の上で、何からの必要と意図に応じて、適宜「島」という表現を用いたのではないかと、いう可能性である。実際の文書に即していえば、まず大陸と対比した象徴的表現である(1, 12)。また、ヴィレラの記述(9, 11)に見られるように、各地に「W rei/rey」が見出されてもはや一つの「王国reino」とは言いがたい日本を包括的に表現しようとする試み—terra/tierra, provincia⁶⁷などの語とならんで—ともとれる。1595年に刊行されたテイシェイラ図(Ⅱ章5節参照)が、なお単数形の「島」と題しているような、ヨーロッパ人の間に残るイメージに、宣教師の側が一定の配慮を示す場合もあったろう。

以上3つの可能性を挙げてみたが、そのいずれかが決定的だったかについては、現時点では判断材料が不足していると言わざるをえない。筆者としては2の要素を重視したいが、むしろこれら複数の要素が互いに影響し合っていたとみるべきかもしれない。いずれにせよ、日本像の「島」から「列島」への変遷は、大航海時代、ヨーロッパ人が「三大陸」に象徴される所与の世界像を、実見情報に

もとづくそれへと転換していく過渡期の事例として、興味深い素材を提供しているといえる。

注

- 1 拙稿「16世紀スペイン語文書の日本記述における「権力・空間」イメージについての一考察 A.ヴァリニャーノの『日本諸事要録』（1583年）を中心に」『イスパニア図書』11, 2008年。日本布教初期のスペイン人イエズス会士による権力・空間イメージの形成過程—トレスとフェルナンデスの書簡群を事例として, 1549~70年』『イスパニア図書』12, 2009年。「イエズス会士ガスバル・ヴィレラの日本関連書簡群に見る権力・空間イメージについての一考察, 1554-71年」熊本学園大学『総合科学』18巻1号, 2011年。「A.ヴァリニャーノの見たイダルゴとサムライ」『日本諸事要録』（1583年）の身分・官職呼称をめぐって』『スペイン学』14号, 2012年。
- 2 複数の島を形容する語は数種類あるが、以下本稿では、原則として以下の意味合いで使用する。
列島：日本が本州・四国・九州の主要3島から成ることについての明確な理解、ないしそれにつながる認識がうかがえる場合。
諸島：島が複数存在していると述べているが、上記の理解との関連が不明な場合。
群島：（特に地図資料に関して）複数の島が列状、塊状に凝集して描写されている場合。
多島海：（特に地図資料に関して）複数の島が広範囲に散在して描写されている場合。
- 3 ヴァリニャーノ、松田毅一他訳『日本巡察記』平凡社東洋文庫, 1973年, 5頁。
“una provincia de diversas islas, repartida en sesenta y seis reinos”, Alejandro Valignano, S. I., *Sumario de las cosas de Japón*(1583). *Adiciones de sumario de Japón*(1592). Ed. por José Luis Alvarez-Taladriz. Tomo I. Tokyo, Sophia University, 1954, p. 4.
- 4 松田毅一監訳『16・7世紀イエズス会日本報告集』I~III期（全15巻）、同朋舎, 1987-98年。今回検討する宣教師の書簡は第三期（全7巻, 1994-98年）に収録されており、原本は1548~80年の書簡と81~87年の年報を収録し、1598年にポルトガルのエヴォラで出版された書簡集（次註参照）。以下註では、たとえば『報告集』第三期第1巻10頁からの引用の場合は『報告集』1, 10頁というように記す。
- 5 *Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de Iapão & China aos da mesma Companhia da India, & Europa, desde anno de 1549 até o de 1580* (2 tomos, Evora, 1598), Classica Japonica. Facsimile Series in The Tenri Central Library, Tenri University, 1972. なお、本稿に関連する書簡はもっぱらtomo Iに収録されているので、以下註では書名・巻数は省略して、フォリオ番号および裏表のみ記す。

- 6 宣教師の日本記述におけるlegua (スペインで約5.5km, ポルトガルで約6 km) は、日本の「里」に一致していることが明らかになっており、『報告集』では、来日前に書かれた文書においては「レグア」、来日後の文書では「里」と訳されているが、本稿では双方について「レグア」とし、適宜コメントを加える。
- 7 中村拓『鎖国以前に南蛮人の作れる日本地図』全3巻, 東洋文庫, 1966-67年。
- 8 岡本良知『16世紀における日本地図の発達』八木書店, 1973年。
- 9 織田武雄『古地図の博物誌』古今書院, 1998年, とくに「ヨーロッパの地図に描かれた大航海時代の日本」(67-159頁)。
- 10 三好唯義「ポルトガル地図学史上における日本地図の変遷」『神戸市立博物館研究紀要』1号, 1984年。
- 11 その他, 本稿の執筆にあたって, 以下の文献を参照した。ルッツ・ワルター編『西洋人の描いた日本地図 ジバングからシーボルトまで』OAGドイツ東洋文化研究協会, 1993年。三好唯義編『図説 世界古地図コレクション』河出書房新社, 1999年。三好唯義・小野田一章『図説 日本古地図コレクション』河出書房新社, 2004年。
- 12 三好唯義「日本地図の変遷とイエズス会報告」『歴史地理学』126号, 1984年。ただし同論文は, 1590年に来日したイグナシオ・モレイラが正確な日本像の形成に果たした役割が重視され, 本稿が対象とするザビエルから『要録』までの宣教師報告については「漠然とした地理観しかない」(38頁)と評価され, 「島」の問題を含め, 詳細な検討の対象とされてはいない。
- 13 否定論に立つ最近の代表的な研究文献としては, 的場節子『ジバングと日本 日欧の遭遇』吉川弘文館, 2007年が挙げられる。
- 14 ベハイムが想定しているジバングの位置(経度)は, 現実のメキシコ付近にあたる。織田武雄, 1998年, 76頁。
- 15 Vitório Magalhães Godinho, *Les Découvertes, XV^e-XVI^e; une révolution des mentalités*, Paris, 1992, p.18をもとに作成。
- 16 『日本古地図コレクション』50頁をもとに作成。
- 17 ヴァイセリアナ図については, 三好唯義「日本地図の変遷」4頁参照。
- 18 織田武雄, 1998年, 96頁をもとに作成。
- 19 織田武雄, 1998年, 101頁をもとに作成。
- 20 東インド図に先立つ1569年に出版されたメルカトルの世界図に描かれた日本も同様のパターンで, 東インド図のそれにくらべ日本島が横(東西)長に描かれている。
- 21 『西洋人の描いた日本地図』, 94頁をもとに作成。
- 22 ポルトガル人アントニオ・ガルヴェンの『新旧発見記』(1563年刊)が, ジバングと日本を結びつけた, 確認できる最初の議論である。岸野久, 1989年, 233頁, 的場節子, 2007年, 4頁参照。

- 23 日本島南端の湾曲は鹿児島湾を反映していると思われる。
- 24 『西洋人の描いた日本地図』, 95頁をもとに作成。
- 25 『日本古地図コレクション』, 52頁をもとに作成。
- 26 織田武雄, 1998年, 63頁をもとに作成。
- 27 奈良時代の僧行基が, 全国行脚をもとに日本初の全国地図(現存せず)を作製したと伝えられる事にちなむ。現存する最古の行基図は仁和寺蔵のもので(1305年), すでにこの時点で「行基菩薩」に由来するとの書き込みがある。
- 28 織田武雄, 1998年, 45頁, 『日本古地図コレクション』11頁をもとに作成。
- 29 織田武雄, 1998年, 61-64頁。
- 30 『日本古地図コレクション』17頁をもとに作成。
- 31 『報告集』1, 4頁。“hua ilha de Iapaõ que está alé da China dozentas legoas, ou mais ...” Cartas (f. 1)
- 32 『報告集』1, 44頁。“esta ilha de Iapaõ está mui desposta para em ella se acrescentar muito nossa santa fê (f. 10).”
- 33 平戸で主要部分を執筆し, 豊後から発する。
- 34 『報告集』1, 181頁。“Yamánguchi, que está no meo desta ilha, para a parte do Norte, cidade mui grãde” (f. 39).
- 35 『報告集』1, 252頁。“Yamánguchi, que sam 60 legoas pola terra”
- 36 『報告集』1, 228頁。“... a bondade diuina tem muito manifestado sua missercordia naquella terra, segundo os grandes cõbates com que o demonio nas ilhas de Iapaõ tem contraminado nossa santa fê” (f. 50).
- 37 『報告集』2, 122頁。“Esta provincia de Iapaõ saõ duas ilhas principaes, que auera de hũa a outra hum terço de legoa (f. 126).”
- 38 『報告集』2, 189頁。“He esta ilha de Iapaõ partida em sesenta & seis reinos, em tempo passado todos obedeciã a hum Senhor a que chamão Dairi ...(f. 143)”
- 39 『報告集』2, 304頁。“... terem estas ilhas grãde contrariedade nas calidades, porque no veraõ sam quentissimas, e no inuerno sam estremo frias ... (f. 172)”
- 40 『報告集』3, 20頁。“He esta terra larga, & grande, tẽ sesenta & seis Reinos: os quares todos são cercados de mar ficando ã ilha ...(f. 193)”
- 41 『報告集』4, 338頁。“... que nos reinos de Europa por regimento de cujos Reis o mundo se gouerna, & em cuja cõparação Iapaõ era hũa pequena ilha de que de poucos tamos para cà se tinha noticia ... (ff. 377-377v.)”
- 42 『報告集』1, 28頁。“... hum Senhor grande daquellas ilhas de Iapaõ quria ser Christão ...” (f. 5v.)
- 43 『報告集』1, 29頁。“... Quando chegamos a Iapaõ, imos determinados de ir a ilha

donde está el Rei ... (f. 6)”

- 44 ザビエルが来日前にゴア, マラッカで触れ得た日本情報については, 岸野久『西欧人の日本発見 ザビエル来日前日本情報の研究』吉川弘文館, 1989年を参照。
- 45 『報告集』 1, 99-104頁。
- 46 実際の地形上で推定されるザビエルの旅程については, 河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』 3, 平凡社東洋文庫, 1994年, 19頁の地図を参照。
- 47 『報告集』 1, 242頁 (f. 54)。
- 48 『報告集』 1, 265頁。“... porque elle he o principal Rei agora de todo o Iapaõ, & não ha duuida, senão que se elle se fizer Christaõ, que as Ilhas do Iapam quasi todas venhão am conhecimento de seu criador, & Sñor (f. 59v.).”
- 49 『報告集』 1, 337頁 (f. 74)。
- 50 座主Zaço・天皇Voo・公家qungeが全国的権威者として挙げられている。
- 51 『報告集』 1, 341頁。“estará trinta e tres graos e meo para o Norte, da banda deta ilha, que declina ao Oriente, em o qual residimos (f. 75v.).”
- 52 『報告集』 1, 342頁。“outra bāda desta ilha de Iapam pera o occidente (f. 75v.)”
- 53 『報告集』 1, 342頁。“... mais pera a ponta da Ilha pera o Sul, a trinta e hū grao, & distará deste Búngo sesenta legoas o mais (f. 75v.)...”
- 54 『報告集』 1, 343頁。“... que está mais ao Norte, o qual distará deste Búngo cincoenta legoas ... (f. 75v.)”
- 55 『報告集』 1, 343頁。“que está escontra o Oriente pera a outra pôta desta ilha, que distará de Búngo 150 legoas (f. 76).”
- 56 『報告集』 1, 342頁 (f. 75v.)。
- 57 『報告集』 1, 342頁。“que está pola terra dentro de Firāndo algūas vinte ou vintacinco legoas” (f. 75)
- 58 『報告集』 1, 343頁 (f. 76)。
- 59 『報告集』 2, 122頁 (f. 126)。
- 60 『報告集』 5, 134頁。“... todo este Iapão que contem em si sesenta e seis reinos pequenos, está diuidido em tres ilhas, ou partes pincipaes ... (f. 433)”
- 61 『報告集』 5, 134頁。“A primeira, & principal que contem em si 53 reinos, aonde está o Miāco que he de todo o Iapaõ a cidade mais nobre ... (f. 433)”
- 62 『報告集』 5, 134頁。“A segunda parte em que se diuide o Iapaõ, se chama Ximo, que cõtem em si noue reinos ... (f. 433v.)”
- 63 『報告集』 5, 135頁。“ A Terceira parte em que se diuide o Iapaõ, he outra ilha que se chama Xicócu, que comtẽ em si quatro Reinos ... (f. 433v.)”
- 64 1561年, 平戸港に入港していたポルトガル商人と日本人商人との間に, 絹織物の取引をめ

ぐる口論をきっかけに生じた衝突事件。松浦氏の家臣も巻き込み、ポルトガル船長以下14名が殺害される流血事件に発展、以後ポルトガル船の平戸入港は困難となり、ポルトガル・イエズス会は他の南蛮貿易港を確保する必要に迫られる。

- 65 安野真幸『港市論 平戸・長崎・横瀬浦』日本エディタースクール出版会、1992年、148—153頁。
- 66 川村信三「アレッサンドロ・ヴァリニャーノ日本宣教政策決定の評価」川村信三編『長領域交流史の試み ザビエルに続くパイオニアたち』上智大学出版、2009年、235—237頁。
- 67 この語は本来reinoより下位の（小さい空間的範囲の）「地方」を指すが、『要録』の引用箇所をはじめ、宣教師はしばしば日本全体を指して用いている。あるいは原義の古代ローマ属州（イタリア、ガリア、ヒスパニア）にあたる範囲に、複数の王国や自治都市が内包されていることを念頭に置いたのだろうか。